

第1章 今西錦司の種社会進化論 1. 前期

今西錦司の生涯

今西は、86歳になってまもない1988年2月に、尿管閉塞を起こして入院する。入院先は、30歳の時から暮らしていた賀茂川べりの自宅の、川を挟んではす向かいの上流側にある社会福祉法人富田病院であった。当初は、すぐにでも退院できると思っていたというが、その予測は完全に外れてしまう。そして、4年4か月後の1992年6月15日、老衰のため、一度も帰宅することのないまま臨終を迎えるのである。90歳の大往生であった。入院した今西を見舞っていた、終生の友である桑原武夫と西堀栄三郎のふたりは、今西が入院していたその4年の間に、相次いで死去していた。

今西は、既にその15年前に、妻の園子を肝臓がんで亡くしている。園子が入院したのは、『ダーウィン論』（1977年、中公新書）を執筆する下準備として『種の起原』を読了し、カード作りを始めようとした矢先であった。今西は、ダーウィンに敬意を表して、邦訳版ではなく、1876年に刊行された原著（第6版改訂版のリプリント。Encyclopedia Britannica, 1952）を拡大コピーしたものを、緑内障のため一方の眼がほとんど見えなくなっていたにもかかわらず、2か月弱で通読している。そして、妻の入院のため落ち着かない気持ちをなだめようとしてその執筆を始め、第9章を脱稿した時点で園子が死去したのであった。享年は、平均寿命よりもはるかに短い68歳であった。

霊長類学の一番弟子たる伊谷純一郎は、今西が死去した当日、東京で「家族起原論をめぐる」と題する講演を行っていた。そして、宿泊する予定をなぜか変更して帰洛したところ、自宅の玄関先で妻から今西の死を知らされるのである。今西が死去したのは、伊谷が京都駅に到着する3分前のことであった。「先生に東京から呼び戻されたのだという思いが去らない」（『毎日新聞』1992年6月16日夕刊）と伊谷は述懐する。

今西のいわば第二期の弟子とも言うべき、伊谷と同輩の河合雅雄は、川喜田二郎と荒俣宏との鼎談の席で、今西の死に関連して、次のような興味深い発言

をしている。

まさに人生の達人だとつくづく思ったのは、亡くなったのがサル年で、しかも葬儀が、京都で霊長類学会〔伊谷純一郎会長〕が開かれた日〔6月20日〕でした。サル学関係者はみんな京都に集まっていた、その日なんです。そしてもう一つ、今西さんは、自然死なんです。老衰なんです。自然学というのを開いて、最後まできちんと自分を締めくくったんです。今西さんが進化論の中でずっと言ってきた言葉の一つに「自己完結性」というのがある。まさに自己完結なんです。自分の人生をあれだけ見事に締めくくるといのはさすがです。〔中略〕自分のいちばん親しい二人をちゃんと看取って、そして最後に完結するんです。恐ろしい人やな、と思ったですね。(川喜田、河合、荒俣、1992年、19ページ)

じかに接した弟子たちが異口同音に証言しているように、今西には、独特の美学と言うべきものがあつた。たとえば、原則として同じ山には二度と登らなかったし、二十万分の一の地図に描き込んでいた踏路の赤線の配置が美しくなければならなかった。その配置を美しくするために、敢えて遠回りのルートを選んだり、既に山頂をきわめていた山も別ルートから登り直したりするという、本末転倒的なことすらしていたのである(今西、1978年c, 128-130ページ; 1987年, 349-352ページ)。河合の感想は、おそらくそうした今西美学を踏まえてのことだったのであろう。

周知のように今西は、京都西陣に、1男3女の長子として生まれている。生家は、「錦屋」という屋号をもつ、西陣織の有名な織元であつた。今西の名前の錦司は、この屋号からとられたものである。西陣織物製造業組合の初代頭取を務めた祖父の平兵衛は、京都市議会議員に就任した翌年の明治32年(1899年)には、イタリアで開催された絹織物博覧会の視察に出かけ、ヨーロッパの製織機や織物について学んできたほどの、進取の気性に富んだ商人であつた(本田、1992年、25ページ)。

しかしながら、今西は、このように経済的にはかなり恵まれた環境に育つたものの、家庭的にはきわめて不遇であつた。住み込みの職人たちを含めた大家族の中で育つたためリーダーシップが自然に身についたなどという、信頼性の疑わしい評価は、これまでも数多く行なわれてきたが、家庭的な不遇にはあ



図1-1 カリフォルニア州の農場で働いていた頃の湯浅八郎（右端）。Yuasa, 2017, p. 18 より転載。

まりふれられることがないように思う。今西は、京都府立第一中学校3年生の時に母親を、第三高等学校理科を23歳で卒業する直前の2月に父親を相次いで亡くし、若くして家督を継がざるをえなかったという、珍しく悲壮な経験を、学業の途上でしているのである。後に今西が、進化という観点から見た家族の起源に強い関心を抱くようになった（たと

えば、今西、1980年、177ページ）のは、このような事情があったためなのかもしれない。

父親を亡くした2か月後の4月、今西は、京都帝国大学農林生物学科（昆虫学専攻）に入学する。昆虫学の指導教授は、後に同志社大学の総長を、戦後には国際基督教大学の初代学長を務めることになる湯浅八郎であった。徳富蘇峰、蘆花兄弟の姉を母として東京のカトリック家庭に生まれた湯浅は、「神と人との前に正しい生活をしたい」という希望をもって留学したアメリカで、農場のアルバイト（図1-1）を契機にカンザス農科大学とイリノイ州立大学で昆虫学を学び、文部省の海外研究員として、アメリカからドイツに留学してから帰国し、新たに創設された京都帝国大学農学部昆虫学科を開講していたのである（同志社大学アメリカ研究所、1977年、24-40ページ）。

今西が農学部を選んだのは、その年の夏に、山仲間とともに初登攀を狙っていた尾根があり、その山行を優先させるために、夏季実習を必修とする理学部を嫌ったためであるという。この年の3月までの1年間に山に費やした日数は、三高の山岳部員の間では、今西が82日で最多であった。ひと月に7日近くを山で過ごしたことになる。この頃は、それほどまでに登山に熱中していたのである。初登攀への熱情はその後も衰えることなく続き、1956年の、日本山岳会によるマナスル初登頂として結実する。今西は、京都勢のみによる決行を、実力不足を懸念してか早々とあきらめ、日本山岳会にその栄誉を譲るという英断を下した結果であった。

1928年3月、今西は26歳で学部を卒業し、そのまま農学部大学院に進学するが、まもなく理学部に移って動物学教室に籍を置く。主任教授は、淡水生

物学者の川村多実二^{た み じ}であった。その年の末に、洋画家、鹿子木 孟 郎^{かの こ ぎ たけしろう}の長女・園子と結婚し、2男2女をもうけることになる。園子は、今西の末妹の友人で、自宅に出入りしていた関係で知り合ったのであろう。岳父となった鹿子木は、作家としても知られていたフランスの駐日大使、ポール・クローデルが1922年5月に京都を訪れた際、クローデルに黒鳥^{くろとり}の別名を呈上した^{〔註1〕}、フランスへの留学経験をもつ関西画壇の重鎮であった。それは、アインシュタインが来洛し、西堀が通訳を務める半年前のことである。クローデルは、この雅名を好んで用いるようになる。

今西は、32年12月に大学院を修了するが、同輩たちの多くと同じく（大串、1992年、39ページ）、その後も職に就くことなく、長い間、無給の講師を続けていた。家庭をもちながらも無給で生活できたのは、「おれはオヤジの財産をくいつぶしたンヤ。そやから、好きなことができた」（樋口、1975年、5ページ）と、後に今西自身が述懐しているように、実家に資産があったからに他ならない。家作の家賃で生計を立てていたわけであるが、そのおかげで、周囲から束縛を受けることなく、自由にふるまうことができたのである。今西は、後述する“芸術圏”にいて、ある程度は羽目を外しながら（たとえば、伊谷、1975年、485ページ；四手井、1989年、489ページ）も、“生活圏”では一家の大黒柱として、あるいは父親として、それなりの責任を果たしていたのである。

種社会進化論の展開

第1部では今西進化論について概説するが、本章以下の3章では、今西が突然変異という旧来の概念を放棄し、生物には自己完結的な性質が内在するという考えかたへ、それまでにもまして傾斜するようになる1975年前後の時点と、ダーウィンの存在が気にならなくなったという意味で「ダーウィンを超えた」

〔註1〕 鹿子木が黒鳥の絵を描いた素焼きの小皿は、クローデル生誕150年を記念して、県立神奈川近代文学館で2018年5月から7月にかけて開催された「詩人大使ポール・クローデルと日本展」で展示された。私もそこで実物を見ている。その写真は、図録『詩人大使ポール・クローデルと日本』（2018年、水声社）にも掲載されている。

〔註2〕 芸術圏あるいは芸術派、生活圏あるいは生活派という言葉は、昭和初期の詩人であった中原中也が、相対するふたつの生きかたを指して使ったものである。第8章（469ページ）であらためて解説する。

として、『ダーウィン論』を書きあげた1977年の時点とをふたつの境界にして、便宜的に3期に分けて概説する。この分類に従えば、前期では『生物の世界』で提示された理論が詳細に展開され、中期では上位社会からの規制という概念が強調されて種社会進化論がほぼ完成し、後期では、プロトアイデンティティや創世の神話といった新たな概念が唱えられることに加えて、科学的方法論には限界があることを理由に、「科学者廃業」が宣言される。

第4章では、この理論に対する内外の評価を扱うことにしたい。それは、主として今西進化論に対する没論理的な批判であるが、それを詳細に検証することによって、今西進化論に対する批判の核心を、さらには、その裏にある、進化にまつわる最重要の概念を浮き彫りにしたいと思う。

今西は、1941年に出版した『生物の世界』の最終章（「歴史について」）の中で、自然選択説の批判を丹念に行なった。この著書は、先述のように、後年の今西進化論の原型になっている。以下、可能な限り今西の言葉に従って解説する。

その前史——『生物の世界』での主張

遺書からの出発

今西は、「私の自画像」を描き出した遺書と位置づけるこの著を、次のような鮮やかな言葉で始めている。私たちの世界は、実にさまざまなものから成り立っている一種の「寄り合ひ世帯」と考えてもよいが、その成員はでたらめな「烏合の衆」ではなく、それを構成し維持し発展させて行くうえでそれぞれがきちんとした地位を占め、それぞれの「任務を果たしてゐるように見える」。そのようなとらえかたが、自らの世界観の根底を形作っているのである（今西、1941年、1ページ）。

こうした世界観からすれば、この世界を構成しているさまざまなものが「ただ偶然にこの世界といふ一つの船に乗り合はせたに過ぎない」のではなく、「お互ひの間を、大なり小なり何等かの関係で結ばれてゐるのでなければならない」。したがって、

それらの船客はみな、船の中で生れたものと考へるより他ないのである。つまり船の中で自然發生的に生れた船客であるにも拘わらず、それがあたかも切符を買つて乗り込んできた船客と同じように、やはり一等船客も二等船客も三等船客も過不足なしに、定員通りに乗り込んでゐるといふのは、

一寸不思議なようにも思はれるのであつて、そこには何か、切符を買つて乗り込んできた船客相互間の關係以上に、深い關係が介在してゐるのでなければならぬであらう。(同書、2-3ページ)

「地球という一大豪華船」が太陽の光を浴びながらその周囲を回っているうちに、「それ自身がいつのまにか乗客を満載した、今日みるような一大豪華船となつた」わけであるが、こうした地球の変化をある種の生長や發展と考えるとすれば、

地球自身の生長過程において、そのある部分は船の材料となり、船となつていつた。残りの部分はその船に乗る船客となつていつた。だから船がさきでも船客がさきでもない。船も船客も元來一つのものが分化したのである。それも無意味に分化したのではない。船は船客をのせんがために船となつたのであり、船客は船に乗らんがために船客となつていつたといふことは、船客のない船や、船のない船客の考へられないことからの當然の歸結である。(同書、3-4ページ)

この世界の構造も機能も、もとはひとつのものから分化、生成したものなので、生物も無生物も、あるいは動物も植物も、もとをただせばすべてがひとつのものに由来する。したがつて、それらの間には根源的な關係が存在するはずに違いないという認識を出発点にして、最終章で、ダーウィン以来の進化論の定説たる最適者生存説や自然選択説、さらにはその根源にある機械論の批判に入つて行くのである。

今西生物社会学の根本概念

生物が、環境に淘汰されることで優者しか残りえないのなら、生物のしていることは創造ではなく投機的行為にすぎない。そうすると、進化は、必然の自由ではなく、偶然の不自由によつてもたらされることになる。生物がこの世に現われてから、既に何十億年かの歳月が経過しているが、その間、生物はすべて環境に働きかけるとともに、環境に働きかけられることを通じて生きてきた歴史をもっている。生物は、そうした生活の指導原理から遊離して、環境とは無關係に、偶然のなり行きにひたすら従つて、この長年月を送つてきたなど

ということが、はたしてありうるものであろうか。身体の延長が環境であり、環境の延長が身体であるとすれば、生物の生活に、身体からも環境からも遊離した部分があるなどと考えることはできない。

にもかかわらず、そのような考えを抱いたとすれば、それは、現実の生物と環境とを切り離れたうで、抽象化された生物と環境の間に因果関係を想定しているということである。こうした発想は、機械論全盛の時代の産物なのであって、これでは、生きものの現実の生活を説明することはできない（同書、171 ページ）。

最も重要な概念である**種社会**（スペシア）は、同書第4章に当たる「四 社会について」の中で、「種の社会」という言葉で初めて登場する。種社会は、社会的な均衡線を互いに接して生ずる棲みわけという現象を理論化するための概念なのであった（今西、1975年、36 ページ）。そして、次の最終章で、「生物の個體なるものは、それがそこに生れ、そこに生活し、そしてそこに死んで行く

[註3] 棲みわけとは理想型を指すものなのであって、それほど明確なものは現実には多くない。後に今西は、「生物的自然には至らないところがある」（傍点＝引用者）として、次のように述べている。「たくさん見ているうちに、これこそ原則的な、あるいは理論的なすみわけだというものにぶつかるんです。それをちゃんとつかんで、それで理論を構築していかなければいけないのです。現実的なものに眩惑されている限りは、いつまでたっても理論はつくれない」（今西、1978年c、29 ページ）。なお、棲みわけに関する観察研究は、今西の同僚であった可児藤吉のほうが優れていたとする主張があるが、これについては第4章でふれることにしたい。

[註4] 後に、この頃の種社会概念について、今西は次のように回顧している。その当時は、『種間』またはそれ以上の問題に終始していて、『種内』のことはまだ全然出てきとらへん。そやから『種の個体に甲乙なし』というようなことは、だいぶあとにならんと出てこんのや」（今西、小原、上山、1975年、331 ページ）。この頃は、種社会と種個体の関係が、まだそれほど明確ではなかったということであろう。なお、種社会という概念が特段に重視されるようになるのは、1949年に出版された『生物社会の論理』（毎日新聞社）からである（今西、1949年、113 ページ）。

なお、河合雅雄は、今西が生物学に初めて社会という概念を取り入れたことを高く評価し、種社会こそが「今西の生物社会学の構造的基本をなすもので、一見混沌とした生物の世界を社会的秩序系としてとらえることに成功した」と明言している（河合、2009年、181 ページ）。

ちなみに、英語でも生物社会学に相当しそうな biosociology という言葉はあるが、それは人間や動物の“群れ本能”などを研究する分野であり、その意味するところは社会生物学 sociobiology とほぼ重なっている（たとえば、Greisman, 1979）。